

東京工業大学 益一哉学長

人生を変えた一冊～好奇心を持ち続けて～



プロフィール

学歴

- 1975年3月 神戸市立工業高等専門学校 電気工学科 卒業
- 1975年4月 東京工業大学 工学部 電子物理工学科 3年次編入学
- 1977年3月 東京工業大学 工学部 電子物理工学科 卒業
- 1979年3月 東京工業大学 大学院理工学研究科 電子工学専攻 修士課程 修了
- 1982年3月 東京工業大学 大学院理工学研究科 電子工学専攻 博士後期課程 修了

職歴

- 1982年4月 東北大学 電気通信研究所 助手
- 1993年4月 東北大学 電気通信研究所 助教授
- 2000年6月 東京工業大学 精密工学研究所 教授
- 2005年10月 東京工業大学 統合研究院 教授
- 2010年4月 東京工業大学 ソリューション研究機構 教授
- 2014年4月 東京工業大学 フロンティア研究機構 教授
- 2016年4月 東京工業大学 科学技術創成研究院 教授
- 2016年4月 東京工業大学 科学技術創成研究院長
- 2018年4月 東京工業大学 学長 (現職)

人生を変えた一冊として今回2冊挙げていただきましたが、まずは『人間失格』からお話をお聞かせください。

『人間失格』と出会ったのは20歳のときです。私は高専から東工大3年次に編入しました。右も左もわからない中、単位を取るために結構真面目に勉学に励んでいました。一方で、どこかぶらっと一人で出歩くのが好きで、一人で物思いにふけるとか、そのようなことに憧れを抱いていました。また、東工大に入って一人暮らしを始めて、大人びた気分になりたくて、太宰治の有名な『人間失格』を読みました。残念ながら、読もうと思った理由は覚えていません。主人公(大庭葉蔵)は漫画家ですが、『人間失格』は太宰治の自叙伝とも言われていますよね。でも、わざわざ主人公を漫画家にして自分のことを茶化して書いているように思ったので、著者は恥ずかしがり屋なんだなと感じた記憶があります。

理工系学生は凝り性なので(笑)、その頃太宰治ばかり読みました。太宰治は『走れメロス』のような作品もあり、同じ著者なのに色々な小説を書くのだなとも思いました。太宰治全集を買おうと意気込んだのですが、残念ながら貧乏学生だったので手を出せなかったです。ただ、このインタビューの前に『人間失格』を読み直したのですが、すごく暗い話で、当時の自分はこの暗さによく耐えたなあと感じてしまいました。

この本を読んだことで、色々な考え方をする人がいるのだと感じる良いきっかけになりました。社会問題等も小説の中に多く含まれていたため、興味が広がりました。この後、島崎藤村をはじめ、遠藤周作などの純文学も読んだのですが、『人間失格』はいろいろな小説を読むきっかけになったので印象に残っています。小説を読むことで“気づき”などのような学びもできていたのかなと思います。

人生を変えた一冊に『憲法講話』も挙げていただきましたが、この本についても教えてくださいませんか。

『憲法講話』を読んだのは中学3年生の時でした。中学生の頃、「社会」という科目の地理とか歴史は暗記科目と勘違いしてしまったので好きではありませんでした。ところが3年生の政治・経済では「考える」ということに繋がるかもしれないと思いました。偶然、夏休みの課題に出たのが『憲法講話』を読んだので感想文でした。結構、真面目に読みました(笑)。岩波新書の一冊で、新書を読むきっかけになったので、この本のことをずっと覚えていました。岩波新書を読んでいるって、何となく教養人っぽくて、憧れていたようにも思います。

最近読み返してみて、この本では、日本国憲法と明治憲法の違いも論ぜられていて、色々な角度からのものの見方があるということを学んだ本でした。

当時は赤線を引いて真面目に読んでいたのですが、その時どこに引いていたのかも一度見てみたいですね。変なところに引いていたら笑っちゃいますね。本の最後まで赤線を引きつつ読み切った、ということを知っているので、当時の自分にとってきっと面白いと思って読んだのだらうと思います。たまたま宿題で出会った本だったけれど、多角的な見方を教えてくれた一冊です。



左から 益一哉著:『大学イノベーション創出論』
宮沢俊義著:『憲法講話』
太宰治著:『人間失格』

学生当時は本をいつ読んでいましたか？

夜中に読んでいたかな。あの頃は読みたいと思った時に一気に読んでいたように思います。高専のころは1週間で新書を6冊くらいまとめて読むことが何度もあり、「読む気になれば1日で読める」ことを学びました。読むのが速いのか真面目に読んでないのかはわかりません(笑)

また、修士の頃、『三国志』を読みました。この小説は毎朝大学に行く前に下宿で朝食を食べながら、そしてキャンディーズを聴きながら読みました。それなりの大作ですので何日かけて読みました。今でもキャンディーズの曲を聴くと中国の英雄や原野が頭に浮かびます(笑)。音楽を聴きながら長編を読む際は、曲に気をつける必要がありますね。

最近は何を読んでいますか？

実は、あまり読んでいないです。ただ『文藝春秋』だけは20歳のころから毎月欠かさず読んでいます。高専から一緒に大学に進んだ友達が読んでいたことがきっかけです。今は記事全部を読んでいないのですが、昔は隅から隅まで読んでいました。

現役の教員の時は専門書も読んでいました。あるとき専門ではない「集積回路における電磁気学」という講義を頼まれたときには、ひと夏かけて電磁気学の古今東西の教科書や名著と言われる本を60冊ほど読みました。とにかく片っ端からめくって...あの時は学者の端くれとして結構読んだと思います。最初から最後までを読み切って、もう一度最初に戻るこの重要性を本の読み方においても通ずるところがあると認識しました。

読書ではないですが、映画も2度3度見る場合があります。結末を知っていても面白いものは面白いですよね。SF物や『STAR WARS』や『ミッション：インポッシブル』などシリーズものを始めいろんなジャンルを見ています。東北大にいた頃、週末深夜に一人でロードショーをよく観に行きましたし、ビデオが広まると1950年代60年代の白黒映画なども観るようになりました。名作は時を経ても名作です。

学長のお仕事について教えてください。

学長になって研究の最前線からは離れています。東工大は研究大学ですので、学長として研究をする環境、特に教員それぞれがどういう環境であれば研究ができるのか、予算をどうすれば獲得できるのかということの日々考え、実行しています。

学長の仕事の一つは、常に東工大の一步先のことを考えることです。理事の人が今日や明日のことを議論しているなら2、3日先を考えますし、理事の人たちが向こう1年を考えるなら学長は数年先を考えます。皆で10年後を考えるなら更にその先を意識しないと、それぞれの人が担当している職務のベストを發揮できません。

それから会社社長や多くの組織の長と同じで、例えば学生が怪我をしたなど、日々様々なアクシデントが起こるのでそれらに対処します。研究者であったときに朝から晩まで研究のことを考えていたかはさておき、学長になってからは朝から晩まで東工大のこと、教育や研究、学生、研究者、事務・技術・支援職員の働き方など全てのことを考えています。兎にも角にも朝から晩まで東工大のありとあらゆることを考えています。自分でも信じられないくらい東工大のことを考えています(笑)。自分でも不思議です。

学生に向けてメッセージをお願いします。

本の話から始まったけど、結局は好奇心を持ち続けることが大切で、好奇心の一つが読書に繋がるのではないのでしょうか。好奇心を持ち続けてください。そうでないと、私が学長になった理由の説明がつかないですね。



先生ご自身も本を書かれていますね。

『大学イノベーション創出論』は大学の色々な方と議論したことが元となっています。あとがきに何故、私が学長になったかについて触れています。2016年に研究院院長を任されて、新たに好奇心を抱きました。研究者が新しいことを発見したいと思うのと同様に、大学の経営やマネジメントも面白そうだと感じました。色々なことに好奇心を持ち続けることが大切だとあらためて思いました。

それから最近、『電子物性とデバイス』という教科書を出しました。この本は20年程前に執筆を依頼され、紆余曲折を経て同僚の天川修平先生(現・広島大学)と議論を重ねてやっと書き上げました。学生の時の恩師である高橋清先生の「半導体工学」、東北大での恩師である御子柴宣夫先生の「半導体の物理」はこの分野での名著として有名です。それらに負けない本になると自負しています。

学者としての好奇心、学長としての好奇心、それらの一端を本と云う形で表現できたかなと思っていました。



**好奇心を持ち続けることの大切さがわかりました。
本日はお忙しいところありがとうございました。**

インタビューー

黒丸 愛美 (環境・社会理工学院 社会・人間科学系 D1)

中島 晃洋 (環境・社会理工学院 融合理工学系 M1)

島崎 未緒 (環境・社会理工学院 土木・環境工学系 B4)

以上図書館サポーター